

YO-U

瓊



2020. 6. Vol.20 No.2 Summer

抱き枕

波戸辺 のぼり

桜前線甲斐駒ヶ岳稜線
 青空に一組だけの花筵
 お叱りの電話受けてる花の下
 乳母車に幼子五人飛花落花
 勝負服色とりどりに春の騎手
 朧夜のすぐ逃げたがる抱き枕
 豆の花一年生が通らない
 退屈な一年坊主葱坊主
 子供何処老人何処チューリップ
 一日を夫だけというヒヤシンス
 フライパン育てて十年蝶の屋
 シフォンケーキほろほろちぎり春惜しむ

人は自分がないものに惹かれる。「凛」という字が好きなのは、凛とした人に憧れているからだ。
 茨木のり子、石垣りん、佐野洋子らの作品からは凛としたものが感じられる。音読しても心地良い。
 「人間が老いていく、壊れていく姿というのも見せたかった」「役者は当たり前の生活をし、当たり前の人たちと、普通にすることが基本」こんなことを言う樹木希林さん、あなたも凛としてカッコいい！
 「まさに」「私と也哉子と、時々、裕也」だった」と映画【東京タワー オカンとボクと、時々、オトン】の完成披露試写会での言葉には笑った。
 希林さんの葬儀の際、娘の也哉子さんの喪主代理の挨拶が素敵だった。「おごらず、他人と比べず、面白がって、平気に生きればいい」といつか母に言われた言葉を必死に記憶から手繰り寄せたと話した。この母にしてこの娘ありと思った。

噛んでたい

林田 麻裕

春の風僕の心をふくらませます
 今日の彼女は悲しんでいたシクラメン
 暖かや傘をパッチン片付ける
 一日中パン噛んでたい春日かな
 漫画なら頭に入る目借り時
 将来の私のベッド春の雲
 赤ちゃんがぶつかってくる春の昼
 掲示板のガラスに映す春の服
 ブランチの後の図書館春うらら
 雪柳小犬一瞬振り返る
 ハンバーグ形オムライス形春の雲
 耳の遠い祖母でも分かるタンポポは

秋という漢字が好きだ。書くだけで秋の季節が現われる。涼しい風が吹いてくる。夏が苦手だ。すぐにふらふらになってしまう。だから十月が一番好きだ。待つて待つて待っていた秋が来たぞー肌寒いのもうれしい。
 秋になったら街にどんどん出かける。私の秋は美術の秋と読書の秋だ。展覧会に毎週のように行って、図書館に毎日のように行く。スカートをはいておしゃれをするのも楽しい。
 今は春。桜を見られるのはいいけど、これから嫌いな夏に近づくとと思うと恐ろしい。ウィルスのせいで街に出かけられないし、おしゃれができない。
 今年の秋は平和であれと祈る。素敵な秋を今から楽しみにしている。

風を摘む

火箱 ひろ

春の風比良の山彦連れてくる
草餅を褒めてそれからあらためて
パンデミックの闇のぼんぼり雛の間
ももとは生物教師亀が鳴く
蟻穴を出るそのなかにアナキスト
なんとかのムニエル食うて龍天に
ちよさんが来るほうれん草に花が咲き
鬼の子が自転車でくる春の宵
春の闇老いたる猫の団十郎
春深く母の目をした象の母
草を摘む日溜まりを摘む風を摘む
一生に風船いくつ膨らます

苗札

松井 季湖

よろこびもなみだも知っている蒲団
春風駘蕩高野豆腐の甘く煮え
なりわいや余寒の水に研ぐ包丁
楳ひとつくべ足すほどの余寒かな
淡海の小さく波立ち梅ふふむ
三月のこの不条理に並びおり
ほつほつと肉球揉んで春を病む
春炬燵猫がじーっと見ているの
珈琲にミルクの渦やリラの雨
苗札に書く花の名と花の色
まなうらにれんぎょうの黄のあふるる夜
寡婦となりし友に吹け吹けミモザの風

結婚してしばらく「婦人之友」の「友の家」に通った。そこで素敵な、洋風肝っ玉母さん、グランマといった風貌の田淵さんに出会う。
田淵さんのような、衣食住なんでもこなせる女性になりたかったが、それは無理というもので懂れで終わった。
田淵さんとお別れするとき、私に「懂懼」と書かれた色紙をそっと渡された。
その裏に毛筆で「一略一いつまでもお健やかで、若々しく美しく、田淵」とあった。四季折々、掛け軸の色紙を替えるとき、いつも目にする少し薄めの墨痕。「懂懼」。あれから四十年、あの頃の田淵さんの歳になった。「若々しく美しく」は風貌でなく心だと、だんだんにわかってきた。
いろいろな「懂れ」の先のひとつに「理」があった。二十年を共有し、信頼できる仲間を得た。良き人生と言える。

親戚の鮮魚店に勤務して二十余年になる。店の名前は「奥石」。母方の祖父がリヤカーを引くことから始めた商いも、今は三代目になる従弟が跡を継ぎ、頑張っている。
私はこの店で、惣菜作りと接客業務をしている。奥石にはこの小売店のほか、仕出し料理・宴席部門があり、冠婚葬祭や同窓会などに、地域の皆さんにご利用いただいている。

始まりは「奥石」ではなく「魚石」だった。二十数年前に宴席部門を始めた時、達筆なお得意さんに玄関に掲げる看板の名書きを依頼した。その際、「奥」という文字は縁起が良いと聞かされ、「魚石」は「奥石」となったのだった。

さて、今回のコロナウイルスである。もちろん宴席の予約は軒並みキャンセル。先の見えない、もどかしく不安な状況が続いている。
こんななか、先の話思い出したのだった。縁起が良いという「奥」の字。この一文字をお守りに、困難な状況を乗り越えていきたい。

朧

おーた えつこ

月の出やブロッコリーが満開で
猫が見てる「無印良品」の巣箱
思い出がちくちく光る風光る
鏡拭く花粉症の息吹きかけて
似てるねと言われて雛の髪少な
ぱっふんぱっふんマスクの呼吸返る
辛夷咲く電子レンジがチンと鳴り
ロボットの律儀な掃除朧かな
ほうれん草の赤いところの夕間暮れ
都市封鎖空いっぱいの桜かな
桜散りそめこの世の右往左往
二千年をゆったり撫でて桜守

「竜」という字を見ると、小さいドラゴンだなあと思う。尻尾を振りながらちょまか動きまわる。「龍」より可愛い。
「竜」雨の空を飛ぶ竜が一匹。がんばってる。
「滝」竜がびちびち元気に跳ねて水しぶきが上がる。

今日、庭の一角でもしゃもしゃと繁殖し過ぎていた竜のひげを少し刈り取った。散髪してみたい。竜のひげ、文字通り竜のひげを散髪しての気になってきた。刈り取った下からいくつもの竜の玉がころころ転げ出てくる。青くて美しい玉があとからあとから。

竜はやっぱりお宝を隠してるんだ。

嘘ついた

たかはし すなお

呑み込んだ言葉むくむく青き踏む
親友と言われてしまう草団子
地球には北極南極目刺し焼く
恋人の賞味期限が切れて春
シヨッキングピンクのチョゴリ蝶の昼
散つてゆく淡墨桜ふと目眩
今日僕ハ足長蜂ダキミヲ刺ス
紙風船紛失事件報告す
嘘ついた子から消えゆく春の宵
雛流すコロナウイルス流す
さくら咲く世界各国鎖国中
タケルがさ植えたんだってこのサクラ

私どちらかと言うと理数系女子です。数式に数字を当てはめて答えがパキンと出るのが好き。でも暗算は苦手。もつと苦手は国語。「この文章を読んで思った事を述べよ。」この類の問題は、どうも先生やみんなと意見が合わない。そして漢字テストは暗記力がないので駄目。

それなのにエッセイのお題が「好きな文字（漢字一文字）」だなんて、頭が痛い。そうだ父がつけてくれた名前、直子の「直」これしかない。思いつく熟語は、直角、直線、垂直、あなんと数学的。正直、素直、これは硬いが素敵な言葉だ。直情、直土、直行、実直、なんて言葉もある。父はどんな思いで「直子」と名前を付けたのかな。

とりあえず俳号は「すなお」である。

軋む

こゝ ねんむ

梅ふふむお早うおはやうございます
 草の根のほろほろ春の土匂う
 白木蓮ふくふくにこにこ九十歳
 春隴規則正しく寝る魚
 昼の女神夜は休まれ春満月
 チューリップ咲かせ上手なお母さん
 しゃぼん玉乳歯が揃いよく笑う
 花種時く宅配便にアンデルセン
 水色の帽子が咲いて春日和
 桜から桜へ夫と違う道
 豆の花自転車置いたまま帰る
 飛花落花地球の軋む音がする

賀茂川の桜が咲きだすと、季節外れの雪かと思間違うほどの雪柳が堤を真っ白にする。連翹の黄色い花も満開。正に百花の春だ。桜が散り始め葉に変わる頃、山吹や花蘇芳が咲きだす。春の堤の、木の花色変わりを見ているのも楽しい。その頃から芽を吹き始めた榎や榊、櫻の早緑の木の葉がやわらかく光りだす。その初々しさに思わず胸が熱くなる。ゆっくり呼吸のできる春の一番好きな風景だ。大きく息を吸ってみると、ほんわりと少し温まった空気がお腹にまで届く。幸せな気分になってまた歩く。人がもたれたり、子ども達が手をつないだり、犬が寝転んだり、鳥が休んだり、こっそり巣作りしたり、季節が変わることをそっと知らせてくれるのも木、見えない地中に根を張って、集まってくる全ての生き物を照って受け止めてくれる大きな木。玄関先が増える植木鉢も、本当は一本の大きな木になりたいと思っているだろうな。

軽トラ

辻 響子

空色のハンカチ広げ涅槃西風
 囁りやほくろは右にあつたはず
 ステーションピアノずんずん卒業子
 白木蓮アザレア清し外ごはん
 春暑し腕のタトゥーに魅せられて
 一巡はおよそ四キロ桜狩
 さくらさくら前髪ほんの少し切り
 筥に運配上がる今日の宴
 おつさまの軽トラ駆ける竹の秋
 二、三匹受け口もいて桜鯛
 春深く蜂蜜の棚うす暗く
 色褪せし茶の実の家紋風薫る

うぐいすが鳴いて、学校からキンコンコンと授業開始の音、ヤクルトのお姉さんのバイク音、遠くでは草刈機の音がします。のんびり響く音は心地良いです。「ふってもってでも日々是好日」と書かれた文字が、心に響きます。本も音楽も絵も映画も、洒落た感想を、言いたいのですが、ボキャブラリーが少ないので心の中のすべては出し切れません。「心に響いた」と話せば、私の感動の大きさを解ってもらえると勝手ながら信じています。そして心に響く話し方をしたいから、低い声でゆっくり丁寧に、控え目に喋ることも心掛けています（これがオバさんにはなかなか難しいのですが）。そんな事を思いつつ、友人の0歳児を抱っこして日向ぼっこ。近所の長老とお茶を飲んで、一日を過ごす響子さんです。響の文字が好きです。

紅一点

辻 水音

父が塗る畦は万全日照り雨
草鎌に「辻」の焼印春日向
花大根遺影の海は青々と
龍神湯しゆわしゆわ溶けて春今宵
つぶつぶつぶさんしゆつぷやくよ
わけあつて臨時休診チューリップ
風光る家族写真を撮りにゆく
目薬はアセロラの色おぼろの眼
つかずはなれずのキャンケイ白たんぽぽ
まだすねているのかしらん木の芽和
墓出づる紅一点にして老けて
お先にと犬に一礼土手青む

父の名前は「治郎太夫」ジロダユウです。伊勢大神楽の獅子舞のようで子供の頃には複雑なものでありました。「治」のルーツはよく知りません。
地元の中学校に通学していた五人の兄弟達の誰かが、先生から「ジー」というニックネームで呼ばれていたそうです。一番末の私が入学しても同じ呼び方をされるのは心地良いものであります。
二人の兄の名前に「治」が付いています。兄の長男にもまたその子供達にも付いています。こうなつてくるとよほどこの字は靈驗アラタカか、と思うけれど皆ふつてです。私は息子の名前にも「治」を一字もらいました。いつまでも生家と繋がっていたい気持ちだったのか、今考えると「なんでやねん」と思うのですけど。
我が一族は、よく働き地味で遊ぶを知らず：これが「治」の真の意味ならこれもまた一つの生き方であると思うわけです。

珊瑚集

葉桜

はしもと 風里

ミモザたわわたわ何する気もおきず
落ち椿蛇口はひねるものでなく
すれ違ふ春のマスクを深くして
自転車が残す口笛蔦若葉
三月や桃いろ黄いろ溢れさせ
デージーの原種しづかで気むづかし
花冷えや読みたい本が待つてゐる
人声を聞かぬ一日若葉風
夜の庭の葉叢をこぼる春灯
春灯し遠い人らの懐かしく
黒雲に蓋をされたる春の街
葉桜や高速エレベーターに酔ひ

珊瑚集

二月からほぼ毎日、新型コロナウイルスのニュースを見ない日はない。日を追うごとにウイルスを身近なものとして考えるようになり、気持ちがおろおろと落ち着かない。
今回のエッセイのお題は「好きな漢字一文字」これまでずっと「透」という漢字が好きだった。磨かれたグラスに注がれた琥珀色のウイスキー、硝子窓の外に広がる櫻若葉、美しい。とても美しいが、違う。
今の私は地に足を付けて落ち着きたい。好きな漢字は「実」。真実、充実、誠実。それに果実、結実。
緊急事態宣言が出ていよいよ果ごもり状態。現実を冷静に受け止めよう。今、好きな漢字は「実」。だが硝子越しの櫻若葉に慰められているのも事実だ。